

8.(L) 唾液腺・消化器

(311-314)

311～313席は、唾液腺に関するものであった。

中西ら（信大・放）は^{99m}TcO₄⁻の局所動態にもとづいた唾液腺のfunctional imageを考案し、シンチフォトとfunctional imageの併用により、腫瘍の局在部位を明らかにすることが可能であることを述べた。検出能の向上が期待され有用な検査法であると思われた。

曾根ら（川崎医大・放）は⁶⁷Gaと^{99m}TcO₄⁻によるシンチグラフィおよび分泌機能検査を併用する方法を行い、腫瘍の良性、悪性の鑑別に有用な手段であることを報告した。病理組織診断の域にまで及ぶ検査方の確立を期待したい。

高木ら（慶大・放）はシェグレン症候群に経時的な唾液腺シンチグラフィを行い、唾液腺機能の定量的評価を試みている。各種のパラメーターを対比することにより、機能障害の程度の把握を行い、本法が治療効果判定ならびに経過観察に有用であることを述べた。臨床的に意義のある報告であり、今後大いに期待される。

高瀬ら（日本医大、新潟歯・放）は頭頸部の放射線治療後の症例に⁶⁷Gaシンチグラフィを行い、⁶⁷Gaの集積の程度と線量の関係について報告した。頭頸部腫瘍の放射線治療を行うと、唾液の分泌障害で悩まされることが多い、これらの症例の分泌能回復の予後判定として、^{99m}TcO₄⁻による唾液腺シンチグラフィの定量的評価等、唾液腺の分泌機能のRI検査については、まだまだ検討する余地があると思われる。さらに、よりよい診断法の確立が望まれる。

(熊野町子)

(315-318)

315～318の4題は消化管機能（吸収、運動）に関するものであった。この領域は核医学の中で取り残された分野の一つである。

315、聖マ医大鈴木らは¹³C-グリココール酸(GC)500mg経口投与後呼気中の¹³CO₂を赤外線分光計を用いて測定することにより、腸管内におけるGC脱抱合を推測できることを報告した。ileal bypassによるミセル形成不全の吸収不良症候群症例を例示し、赤外線分光計による¹³C呼気テストが吸収不良症候群の病態診断に有用であると述べた。stable isotopeがRIに代わって人体における吸収や代謝のトレーサーとし広く用いられるようになってきた。

316、東邦大1内野口らは^{99m}Tc Sn-コロイド0.4～1mCiをオレンジジュースと混和して服用させた後に坐位で10分間撮影し、食道への逆流を検することにより、逆流性食道炎の核医学検査を行った。発表をみた限りでは陽性例が1例のみであったが、今後他の検査、たとえば通常の経口バリウムX線造影法や内視鏡検査、さらにつかれば食道内圧測定法などの比較検討が望まれる。

317、近畿大熊野らは^{99m}Tc Sn-コロイド1mCiをボンコロン昼食用100gとともに与え、摂食直後より30分間のtime activity curveよりT1/2を計算し、slow(S)型、delayed(D)型、rapid(R)型に分類した。この方法により食道癌再建胃管の機能を検査し、再建術式別に論じた後縫隔群ではS型、胸骨後群ではD型、胸骨前群ではR型がそれぞれ多くみられた。

318、奈良医大がんセンター芝辻らは¹¹¹In-DTPA200μCiと^{99m}Tc-DTPA2mCiとのdual RI法で胃排出時間測定を行うための条件をカメラwindow幅、アクリル板散乱体の厚さ、おのおのの投与量などにつき種々検討した。2種類のRIをそれぞれ固体相と液体相として、両様の混合食事の胃排出時間を測定する方法であり、興味深い。

(細田四郎)